

# 嶽 一灯（だけ・いっとう）

## 1、プロフィール

ホトトギス同人宮野子提灯に師事。「火山群」代表。「萬緑」会員、「北鈴」同人。上十三地区俳句連盟創立に参加。「薫風」創刊同人。

<生没>

1935(昭和3)年11月10日 ~ 1991(平成3)年9月29日

<代表作>

独り居の度忘れ嗤ひ春惜しむ  
砂の音三日月の匂ふ茅の輪をくぐり  
蝮乾す竹の割串見て通る  
笹裏のくらきを喰みて寒立馬  
斑雪遠く来て嘴を抜く鴉

<青森との関わり>

上十三地区俳句連盟創立に尽力。俳誌「火山群」代表。

## 2、作家解説

岩手県生まれ。本名は神喜蔵。1946(昭和21)年、岩手のホトトギス同人、宮野小提灯に師事する。1955(昭和30)年、十和田に移住し、白鳥時計店を開業。1956(昭和31)年、大久保巖らとともに火山群俳句会を結成し、代表となる。1961(昭和36)年、俳誌「萬緑」に入会。その後、俳誌「北鈴」同人。1979(昭和54)年、俳人協会青森県支部副部長、青森県俳句懇話会委員。1984(昭和59)年、俳誌「薫風」創刊、同人。温厚聡明な性格で知られていた。

句集に、『ともしび』(薫風叢書第2号、平成4年9月29日発行)がある。

### 3、資料紹介

○『ともしび』

1992(平成4)年9月29日

190mm×130mm

嶽一灯の一周忌に発行された遺句集。胎動期、黎明期、円熟期の三期に分けて構成。加藤憲曠の序文、日野口晃などによる追悼文が掲載されている。